
やさしいのひら

明銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やさしいのひら

【コード】

N3069H

【作者名】

明銀

【あらすじ】

一人の母親が己の弱さを意識しながらも、息子とともに生きていくとがんばる話。NHKみんなのうたで放送されたGoing Under Groundの名曲『トウモロウスソング』を小説化。

まえがき

『やさしいのひび』

For every Mothers & Fath
ers,
Who one need to brave for to
save one's child.

作：明銀

掲載：『いつかみたあの空のような』

夜風がカーテンを揺らして、月明かりがさしこんだ。

ひんやりとしめった空気が気持ちいを穏やかにしてくれる。

「あしたもきつと、いい日になるよ」

息子の言葉だ。先月五歳になった。幸せそうな寝顔をみつめていて、ふと「おやすみ」を言い忘れたことに気が付いた。

毎日残業が続いている。今日もだ。目の奥がなんとなく重たいし、肩が張っている。電子レンジのなかにはまだ手をつけていない晩御飯。食べなければ身体がもたないことは分かっているけれど食べるのもめんどうで、食欲もわかない。

十七時に保育園が終わる。それではとても間に合わないの
でおばあちゃん、つまりわたしの母に息子をたのんだ。二十時には迎
えに行くから。そう約束して家を出たけれど結局会社を出て、電車

に乗り込んだのが二十時半。

母の家についた頃には二十二時にほど近かった。

この子にはわたししかない。それでも人並みの、いやそれ以上の幸せをこの子に与えたい。そのために働いている。残業だつて引き受ける。お金が必要なんだ

じれつたいような気持ちを抑え、電車の中で自分に言い聞かせた。けれど帰り道、眠たそうな息子の手を引きながら自分にはなにか大切なものを手放そうとしているんじゃないかと不安に思った。

起こしてしまわないようそつと手をのばして、小さな掌をにぎつた。とても暖かい。小さな胸が上下して、ゆっくりと呼吸をしている。

たったそれだけのことで慰められている。胸が軽くなって、温かいもので満たされる。この子の幸せをずっとずっと守りたい。そう思える。

つよくならなくちゃ

手の中に、小さな温もりを感じながらそう誓った。

天井から垂れ下がった紐を力チリと引くと、明かりが消える。おやすみ、と小声でつぶやいて布団にもぐりこんだ。

明日も仕事だ。洗濯物を干してそれから朝ごはんをつくって……頭の中がちかちかして、なかなか寝付けない。そんな夜が多い。

薄明かりのなか、布団にくるまる小さな背中をながめる。そうすると胸が少しおだやかになった。

全部忘れられたらいい。仕事のこと、明日のこと。

それに子供のことだって

……まぶしい。

くちびるを何度もつつかれて目を開けた。じっとみつめてくるふたつの瞳。にかにかと笑いながら、さかさまに顔を覗き込んでいる。

まさか寝坊した？

いつきに目が覚め、それから力が抜けた。

今日は日曜日だ。仕事は休み。息子と自転車の練習にいく約束をしていた。ばくばくと弾む胸を押さえながら、ぐったりと横になる。目が覚める少し前、おぼろげに浮かんでいた気持ちはまだ頭のあたりを漂っている。

「ねえねえねえ、きょうはじてんしゃのひだよ」

くるくるとよく動く瞳は、まるでウロコをきらめかせて泳ぐ小魚だ。はしゃいでいる息子を見て、罪悪感が胸を刺す。

ごめん、と心の中でつぶやいて、気合をいれて立ち上がった。まずは布団を干そう。そうしたら朝ごはんだ。焼き鮭と味噌汁。休みの日はパンじゃなくて、お米を炊くことにしている。あの子はなかなか野菜を食べないから、野菜ジュースを飲ませよう。

カーテンを開けて、ベランダに並んだ鉢植えに水を注ぐ。

「あ、ほら見て。芽が出てるよ」

保育園からもってきた小さな鉢に、ぽつぽつと芽が出ているのをみつけて息子に声をかけた。しゃがみこんでうれしそうに眺めているその身体は本当に小さくて、その小さな身体の中につまっている希望や愛がなによりも尊く感じられた。

ジョウロからこぼれる水が、太陽の光をきらきらと反射した。気持ちのいい風が吹いている。今日はきつといい日になる。

朝食を作ろうと、冷蔵庫の前に立ってから気が付いた。冷蔵庫の低い位置、ちょうど腰のあたりに何か貼ってある。一枚の絵だった。昨日の晩にはなかったから、きつと今朝息子が貼ったのだろう。

真っ白の紙の真ん中に、大きく人の顔が書いてあった。にっこりと笑っている。笑顔の下には緑色のクレヨンで「ママ」と書いてある。

そうか、今日は母の日だ

手にとって眺めると、一番めだつ位置に貼りなおした。胸の奥に、ちらちらと光がさした気がした。

そう、わたしが母親だ。ほかに誰がいるんだ。もう忘れたいなんて言わない。ぜったいに言わない。

それから、そつと心の中で確かめた。大丈夫。まだ荷物は背負える。またすぐに、疲れ果てるかもしれないけれど、それでも大丈夫。わたしにはこの子がついている。

春にきた時は桜でいっぱいのように感じた公園も、よくみると桜でない樹のほうが多かった事に気が付く。今はハナミズキが咲いている。

木陰で自転車についた補助輪をはずす作業をしていただけで、背中がじんわりと汗ばむ。ぐりぐりとドライバーを回していたら、手のひらが痛くなった。

「よーし、取れたよ。これで補助輪なしだね」

誕生日のお祝いで母に買ってもらった青色の自転車を大切そうに、押して歩きながら公園までやってきた。

自転車を買ってもらった日から二週間近く間が開いてしまった。それまでずっと、母と一緒に古い自転車で練習していたという。

補助輪なしでも乗れるようになったら新しい自転車をかってあげる、という約束をこの子なりに守ってくれていたことを聞いてわたしは驚いた。

「最初はママが後ろを押さえてるからね」

自転車はこぎ始めが一番むずかしい。走り出しさえすれば、ペダルの踏み方になれてきて楽に走れるようになる。

真剣な面持ちでこぎだした自転車は、ふらふらと頼りなくゆれながらゆっくりと進んでいく。徐々に速度があがり、ささえる手が離れる。

最初の一回目であっさり自転車に乗れてしまった。少し余裕がでてきた表情で、円を描いて走っている。自転車から手が離れた瞬間ふと寂しさを感じた。自分の知らないところで、いつのまにか成長している姿を見ているとたびたび、こんな気持ちにさせられる。本当はもっと息子の事を知っていたい。どんな風に落ち込んで、どんな風に励まされて、どんな風にがんばるのかを知りたい。できる事なら、見守って支えるその手がわたしのものではあればいい。

これから先、もっと手がかからなくなるかわりに、お金が必要になっていく。だから、仕事はこれまでより増やさなくてはいけない。そうして過ぎていく日々の先で、いつのまにか大人になった息子に気が付いて驚く日がくるのだろうか。

それはどうしようもなく現実で、きっとわたしは自分から望んでそうなる道を進んでいく。それが息子のためになることを願いなから。

雨だ。昨夜から降り続けている。重たくて太い雨の線が、ぼしぼしと地面をたたく。時折、鈍い雷鳴とともに空が光った。

電車が止まっている。わたしのせいじゃない。雨のせいだ。携帯電話を開いて時間を確認する。二十一時十五分。待ち受け画面で息子が笑う。

着信履歴、1件。また母からの電話だ。最近多い。どうせ電話の内容はわかりきっている。息子のことだ。寂しがつているから早く帰って来い。そして説教。もう少し子供のための時間をとつてもいいんじゃないかとか、子供に対して強く叱りすぎだとか。

そんな事わかってる。自分が一番よく知っている。その事で、どうしたらいいのかわからなくて憂鬱になっているのもわたしだ。だから人から、諭す様な口調で指摘されなくなかった。それが母親からなら尚更。

それで今朝も喧嘩した。

仕事が遅くまで終わらないのは、わたしのせいじゃない。あの子に父親がいないのも、わたしのせいじゃない。わたしがここまでして働かなくちゃいけないのも、わたしのせいじゃない。

なのになんで、全部がわたしの責任で、わたしがどうにかしなくちゃいけないような話し方をするの？

ちょっと疲れているだけなんだ。

母だって悪くない。息子を心配して言うてくれているのはわかるし、いつも帰りが遅くなるわたしにかわって息子をみているのは母だ。本当は感謝している。

だれも悪くない。今更、あの子の父親を恨んでも仕方がない。だからこそ胸が苦しい。この気持ちをぶつける相手がどこにもいない。

なきたくなつた。わたしに“こうあるべきだ”と求めてくるもの、たとえば社会人としてのルール、母親としての責任、良い事をしたいと願う良心、こどもの未来。全部投げ捨てて静かになりたい。寄りかかれる柱もなく、座り込める場所もなく、人であふれる駅のホームで、ひとり小さく胸をだいた。

メールが送られてきた。母からだ。

もう遅いので今夜は家に泊まらせます。
気をつけて帰ってきてください。

母より

メールには一枚の写真が添付されていた。
息子の写真だ。風呂あがり撮ったものらしく、髪がぬれている。写真の上に“おやすみなさい”と文字が入っている。
目を閉じた。息を吸い込んで、とめる。子供の頃から、泣くのを我慢する時はそうしていた。雨の音が、頭の奥にしみこんでくる。少し寒い。駅のアナウンスが、電車の到着をつげた。

母の家に着いたのは二十三時を少しすぎた頃だった。
玄関からリビングに続くドアを開けると、父と母がテレビを見ながら眠っていた。ふいに高校生の頃を思い出した。

友達と遊びに出かけたりして、門限に間に合わず帰宅するといつも決まって、父と母がソファーに座ってまっていた。大げさすぎたあきれるほど怒る父をみながら母は普段と変わらない表情で座って

いる。それからもう食べてきたからいい、というわたしをよそにテーブルの上の夕飯を温めなおす。食べ終わるまでは絶対に部屋へ戻らせてくれなかった。

その頃の記憶と重なって、二人が年老いた事を改めて感じる。テーブルの上には簡単な食事。それからバスタオル。変わっていない。住み慣れたわたしの家だった。

湯船の中で、身体を温めながら天井を見上げた。

もう十年以上たつのか

高校を卒業してから、一年浪人。大学へと進学し家を出る。大学卒業と同時に今の職場に就職。それから一年半して、大学時代の友達の紹介で付き合っていた彼と結婚。そして息子が生まれ、いくつかの出来事を経て彼が去る。

すごしてきた日々懐かしさは感じるけれど不思議と後悔や、昔のほうが良かったとは感じなかった。身体があたたまるにつれて、心もほぐされていくようだ。さっき我慢した涙が、まだ心の奥で固まっているような気がして胸のなかをさぐってみた。触れるとひりひり痛んだけれど、苦しくはなかった。

風呂からあがると、母が目をさました。

「おかえりなさい」

いつものような口調でいう。わたしも、いつもどおり答える。

「ただいま」

いつもとかわらない、穏やかなやりとりのなかで心にあったささくれが平らに慣らされていくような気がした。

「あの子、どうだった？」

「ずっとあなたの事待ってたんだけどね、もう寝ちゃった」

眠ったままの父に気を使い、声をひそめて話す。

「遅くなっちゃったけど、自転車ありがと。すっごい喜んでたよ」

「あの子すぐに乗ればいいのに、あなたと約束したからってしばらく古い自転車つかってたでしょ」

母と目をあわせて、ちよっとだけ笑った。

もつどこにも残っていないと思っていた力が、満ち潮のようにすこしずつすこしずつ胸の中をひたしていく。

「もう寝なさい、どうせ明日も仕事ではやく出ないといけないんでしよう」

「わかった。すぐ寝るよ」

まるで子どもの頃と同じような扱いをするんだね、とわたしは笑った。

明かりの消えた寝室で、しばらく息をひそめていた。懐かしい匂いがする。雨が家を伝って流れていく音。それからすぐとなりで、小さな身体をまるめて眠る息子の匂い。

窓をたたたく雨音は相変わらずだったけれど、わたしの胸の中は雨が上がった後のような、しっとりとした静かな気持ちに包まれていた。

昼ごろまで強かった雨脚が急に弱まり、いつのまにかやんでいた。空気の粒ひとつひとつが光を反射してきらめいているように感じる。車や、建物の窓、水溜りなどにつる空の鮮やかな青さに目を細めた。

四時前に職場を出た。まだ日があるうちに家に帰るなんて久しぶりだ。このところ残業続きだったからと、無理を言っただけかなり早めにあがらせてもらった。

今日は自分で保育園に迎えに行くから、と母に連絡を入れる。今日だけ特別の、ほんの少しの贅沢。息子と一緒に食べる夕飯は何がいいだろうか。

太陽がゆっくりと傾いていく。ほんのりと西の空が色づいていた。

保育園を遠巻きに眺めて気が付いたことがある。息子のお迎えにきたのは、これが初めてではないだろうか。三年間も通わせていて、まさかそれはないだろうと記憶の中を探ってみたがすぐには思い浮かばなかった。

お互い見知った様子で会話しているお母さん達の間を通過して門をくぐる。ちらちらと送られてくる視線に居心地の悪さを感じているとくたびれたスーツ姿で、同じように居心地が悪そうにしているご主人さんと目が合い、お互い苦笑いしながら頭をさげた。

「息子のお迎えなんですけどね、私、はじめてきたもんだから勝手がわからなくて」

先生さようならの会がおわるのを待つ間、彼と少しだけ話をした。彼の声はみかけとは違い、若いというより幼さを含んだようなものだった。

「わたしもなんですよ。普段は仕事ばかりで迎えは母にまかせきりだから」

「ああ、やっぱりそうなんです。奥さんもなんだか居心地悪そうにしているの、わかりましたよ」

「主婦の方たちって迫力ありますよね、母親って感じで」

自分とは縁のない風景をながめるように、園内をみわたした。木で出来た小さな家や、地面に半分うまった色とりどりのタイヤ。自分が子供だったころ遊んでいたものも、同じようなものだったけれどなぜか自分とはなじみが薄いような気がした。

ロケット型の筒から放射状に滑り台がのびている。

泥でよごれた白い胴体に夕陽がさして、ほんのりピンク色にまわっている。息子の話によく出てくる“イカさんのすべりだい”とはこれの事だったのか。

「奥さんは、お仕事がお休みかなにかですか？」

「いえ、たまには息子のお迎えを試みようかと思って、早引けしてきました」

「そうなんですか。……じつはぼく、昨日の朝から妻に家出されちゃって」

スーツ姿の彼はそういうと、ふっと笑った。

「ちょっとした喧嘩だったんですけどね、ものすごい怒っちゃっ

て、わたしだって苦労してるんだから！ たまには休んだっていいじゃない！ って」

「奥さんがいないと大変じゃないですか？」

聞いてから、少しいじわるな質問だったかなと思ったけれど

彼は気にした様子もなく、くすくす笑って頷いた。

「もう五歳になったし、息子もそんなに手がかからないかと思込んでたんです。でもたった一日すごしただけで、もうお手上げですよ。普段はないのにおねしょもしちゃって。おねしょって、不安だったりすると出るって言いますよね。」

今まで自分のことを父親としてそれなりにうまくやっていると思っていたのはとんだ思い上がりだったって事を思い知らされたね

先生さようなら、という声が教室から聞こえてきた。おしゃべりを楽しんでいたお母さん方がいつせいに出入り口付近にあつまると、それにならって、集団のうしろのほうへ移動する。

「奥さんとは連絡とれたんですか？」

「ええ、さっき電話があって、お土産がたくさんあるから今夜の晩御飯は作らなくてもいいって。どうも、あいつ家出とか言っておき

ながら友達と旅行に行つてみたいなんです。ほんとに、やりかたがズルインですよ」

若い、わたしよりも年下に見える保育士につれられて、こどもたちが姿をみせた。息子が他のこどもと話しをしている。下駄箱にく流れを止める事になつてしまい、保育士の男の人から背中を押されてる。同年代のこどもたちの中にいる息子を見るのは初めてで、親の知らない顔を見れたような気がしてうれしいような、寂しいような気持ちになつた。

「ああああ！ ままだー！」

まるで、泥棒の現行犯を目撃したかのような大きな声を上げて、息子がわたしにむかつて走つてきた。一瞬周囲の視線が集中したのを感じて、恥ずかしくなる。

「あんまり大きな声ださないでよ、ね」

隣をみるとあの、くたびれたようなご主人さんが息子さんにボールをぶつけられていた。どうやら遊びをせがまれているらしい。困つたようにボールを投げ返す彼は幸せそうで、充分父親の顔をしているように思えた。

「ねえ、なんでわかつたの？」

「んー？ なにか？」

「だから、ぼくがほんとうは、ままにおむかえしてほしいってこと」

半熟たまごのような太陽が、とろりとろりと街並みにしずんでいく。オレンジ色の空気に染まつた街が、濃い影をのばして夜の来る方角を指差している。

「ママもね、毎日おむかえに行きたいって本当は思ってるんだよ」

「そうだったのかあ」

そういつて、うたを歌いながら歩く。

「あのね、きょうね、ぼくね……」

つないだ手をしっかりと握って、大またで歩く。わたしはそれにあわせて、すこし歩幅をせばめた。小さくて柔らかかなてのひらを通して、やさしい気持ち伝わってくる。わたしの掌も、そんな風になっただけいいのに。

悲しさとかつらさを心の奥に押しこんで、何でもないふりをしているうちにいつのまにか、やさしさとか大好きだっという気持ちまで見えにくくなってしまった。

けれど、わたしの隣を歩く、そしていつかはわたしの前を歩いていく彼にだけはどうしても伝えたい。愛する人から愛される幸せ。

誰かを大切におもう事。

「だけどね、やっぱり、おばあちゃんでもいいよ」

「え？ なに？」

「おむかえ、ままじゃなくてもへいきだよ」

君は、そうやって突然わたしの知らない大人みたいな面をみせるんだね

息子の強がりみたいないな気遣いに、ありがとうと心の中でつぶやく。君の幸せをずっとずっと守りたい。そんな風に思っていたけれど、違ったね。君がわたしの幸せを守ってくれている。君と、わたしとふたりで守っていける。

だから、これからもよろしく。

いつか、君が大切な誰かとであって、その優しいのひらがわたしを離れるその日まで。

… e n d

(後書き)

かなり意識した部分がおおいけれど歌詞、歌・映像の内容をできるだけ全部書き起こしてみたつもりです。

『君が思うより 美しい世界 夜があけるまであと少し そばにいて』の部分のみ、シナリオの都合で明確な形にできなかったのが残念。この部分だけは、息子視点で書かないと書けないような気がして文章に組み込むのを断念しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3069h/>

やさしいてのひら

2010年10月9日04時22分発行